保田春彦「都市」：三田メディアセンターの美術品

杉山（すぎやま）　良子（よしこ）
（三田メディアセンター課長）

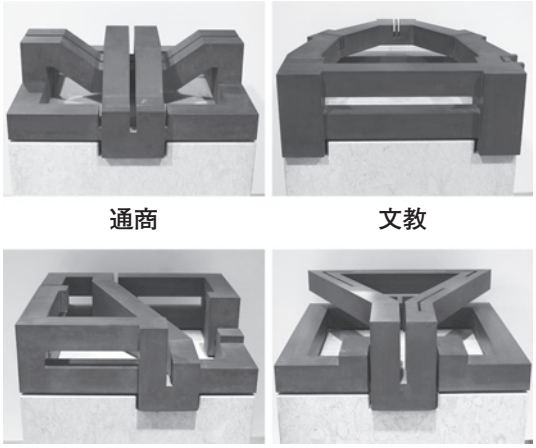
1982 年 6 月 14 日，朝日新聞の夕刊に“建築と美術の実験的出会い：慶応義塾図書館に 4 作品導入”という記事が掲載された。また同年の「芸術新潮」6 月号にも“建築と美術の出会い―慶応図書館オープン”という記事が掲載されている。いずれも同年 4 月に開館した三田キャンパスの新図書館についての記事であるが，図書館の建物より美術品に主眼を置いた記事であることが興味深い。

新図書館は槇文彦氏の設計であることは有名だが，館内の美術品も同氏が建物のコンセプトにあわせ，その当時の美術界の先端をゆく作家の作品を選定したことは，今ではあまり語り継がれていない。

朝日新聞に書かれた 4 作品のうち 3 作品，すなわち，図書館玄関脇にそびえ立つ飯田善国の彫刻「知識の花弁」，入ってすぐ右手にある宇佐美圭司の壁画「やがて，すべてがひとつの円の中に」，2 階のジェニファー・バートレットの絵画「日本の海にて」は誰もがすぐに探し当てることができる。しかし 1 階目録ホール，エレベータ前に設置された 4 つ目の作品である保田春彦の彫刻「都市」は，目録ホールがオープンエリアに大きく変化し，パソコンブースの壁にさえぎられてしまったため，彫刻作品として鑑賞されにくくなっていた。

保田春彦氏は 1930 年，彫刻家の息子として和歌山で生まれた。東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業後，パリでザッキンに学び，その後イタリアに滞在した。1968 年に帰国後，武蔵野美術大学の教員として勤務しながら，ヨーロッパの都市や建築をモチーフに，ステンレスや鉄などを素材に用い，幾何学的な抽象作品を制作してきた。70 歳を過ぎてから描き始めた裸婦のデッサンは 2000 点にもなり，81 歳になった今もなお創作を続けている。

1987 年には個展＜古い都市，新しい都市＞が開催されており，新図書館に展示されている「都市」もその流れの中にある作品と考えられる。「都市」は 4 つの作品から成り，正面玄関から入ると順に「通商」「文教」「開発」「住居」というタイトルが付けられている。八代修次教授が書かれた「塾」（1982 No.3）の



通商　文教　開発　住居

記事から，この作品が「古代都市から得た空想的都市の形態」をイメージして作られた作品であること，大理石の柱だと思われていたものが，実は垂直の台座であったこと，そしてその「垂直」ということが新図書館建築のコンセプトにあったことなどがわかった。しかし，図書館には作品について記録として残されているものがなく，残念ながら正確な制作年などは不明のままである。

2011 年 4 月に新南校舎が竣工，それに伴ってオープンエリアに置かれていたパソコン，パソコンブースが撤去された。空いたスペースに展示室を新設することになったため，フリーアクセスに改装されていた床も元の大理石に戻されることになり，開館当時の状態で作品を鑑賞することができるようになった。これを機に，作品として認識されるよう，学内の美術品管理委員会に個々の作品にプレートを付けてもらうことを検討中である。また，不明である制作年も是非確認したいと考えている。

来年 2012 年には三田の旧図書館開館 100 年，新図書館開館 30 年を迎える。当時の先端をゆく若手作家たちは，今ではみな大御所になった。また 1989 年に本郷新作の「わだつみの像」，2007 年には宇佐美圭司の「路上の英雄 no.3」の寄贈を受け，館内の美術品も増えている。

美術品を含め，変わりゆく三田の図書館の状況をきちんと記録し，後世に引き継いでいきたいと思う。